

私がなぜ現在の科目を選んだか

「小児科」

信州大学医学部小児医学教室

加藤 沢子

わが小児科医局には二種類の間人しかいない。小児科医になりたくて医師になった人間と、小児科に全く興味がなかったにもかかわらず、臨床実習～初期研修を経て自らの子供好きを自覚した人間の二種類である。前者であった私は、他科と迷うことも一切なく、小児科医という道を選んだ。その選択は空腹になれば食事を摂り、眠くなれば睡眠を取るのと同じぐらい私にとっては自然なものであり理由など考えたことも無かったが、このたびこのコラムを書くというせっかくの機会を頂いたので、改めて掘り下げて考えてみた。

診療をしていると、子どもという存在は果てしない柔軟性や可塑性、流動性、可能性を象徴するものであり、どんなに小さな赤ちゃんでも、意外と自律性や自主性に富んだ存在だということに日々気づかされる。しかしこの存在は、大きくなるまでに非常に長い時間と多大な手間を必要とし、育てる側の愛情の減損や嘘や誤魔化しを許さない厳しいものでもある。

ひとたび疾病に罹患しようものなら、子どもはたちまち育てる側にとって理解しがたい存在と化してしま

い、ただただ周囲を混乱と疲弊の渦に巻き込んでしまう。疾病が長引けば長引くほど、その渦は巨大なものとなる。

私は恐らく、疾病により引き起こされた混乱状態を元通りの平穏な関係性に戻す手助けをしたいがために、日々の診療を続けているのだろうと思う。自分の診断が、処方、何より子どもや養育者に向けた言葉が、彼らの日常を取り戻すことに少しでも役に立てばいいと考えているのである。そして、それをきっかけに子ども・養育者の双方が、お互いの成長と発達に気づき、喜びを感じてくれたらと。

そんな自分が我が子の育児において最も好きな作業をひとつ挙げると言われたら、迷わず応えられるものがある。「爪切り」である。1週間に一度、週末に我が子の爪を切る。ひとりひとりを自分の膝に抱っこして、お喋りをしながらできるだけゆっくりと切る。あつという間に新生児が乳児になり、幼児になり学童になってしまった長女。いつの間にか毎週クレヨンやら泥やらを爪の間に詰めてくるようになった長男。指の付け根にえくぼをまだ幾つも残している次女。爪を切るたびに、彼らが数 μm ずつ大きくなっていくことを実感できるから、この作業が大好きなのである。つくづく自分は、子どもの成長と発達を見るのが大好きで、そういう意味では天職に巡りあえて幸せだと日々感じている。

(信大平14年卒)

私がなぜ現在の科目を選んだか

「眼科」

信州大学医学部眼科学教室

星山 健

私が眼科を志した理由の一つは、眼科医にならなければ出来ない診察の特殊性です。

眼科診察は細隙灯顕微鏡と倒像鏡による観察が基本です。眼科医はこれらの診察機器を用いることで、眼球の細部を観察し、診断から治療までほぼすべてを行います。細隙灯顕微鏡は、主に眼瞼～前部硝子体の観察に用いられますが、各々の対象物を最適に評価するために、実はさまざまな診察法があって、適切な方法で目的とする所見を得られた時の喜びは格別です。一方で、倒像鏡を用いた眼底診察は、眼科医になって最初の関門でした。初めは瞳孔の真後ろの範囲ほどしか見えず、それが回数を重ねて徐々に周辺部まで見えるようになる喜びも、眼科医にならなければ知ることが出来ません。たかだか直径2.5 mmほどの小さな眼球ですけれども、観察に限っても中々奥が深いものだ

感じます。最も表面にある角膜ですら自分と上級医の診察で得られる情報量の違いに愕然とすることもありますが、技術の向上を「見る」ことができるため、日々成長しているという実感が得やすく、それがまた次の目標への原動力になっています。

外来診療のイメージが強い眼科ですが、頻繁に緊急手術も行う外科分野の診療科です。ここで眼科手術については是非とも言及しておきたいことは、顕微鏡下で操作を行う手術自体の面白さもさることながら、立体で見た術野の美しさについてです。両目で覗く眼球の内部は、「星空を飛んでいる様な不思議な感覚」「吸い込まれるような美しさ」で、眼科手術に接する機会がある際は、外のモニターではなく、顕微鏡で術野を見て頂けたら嬉しいです。

自分の目で患者さんの眼を見る眼科医にとって、「見える」ということは患者さん、眼科医の双方にとって大切だと私は思っています。入局して2年目のまだまだ未熟者ですけれども、眼科医のみが診れる診療に携われていることに責任と誇りを感じながら精進の日々を送っています。

(山形大平26年卒)